



研究者名※	石井 倫子 ISHII Tomoko	学位※	博士(文学)
所属※	文学部 日本文学科	職名※	教授
連絡先	tisii@fc.jwu.ac.jp		
URL			
researchmap※	https://researchmap.jp/read0196601		
研究分野※	人文学・文学・日本文学		
研究キーワード※	中世文学		
共同研究・競争的資金等の研究課題			
社会貢献・産学官連携活動等	国立能楽堂公開講座講師(1999～2009) 鏡仙会公開講座講師(2004～2006) 観世流研修会講師(2007～2011) 横浜能楽堂指定管理者審査委員・久良岐能舞台指定管理者審査委員(2005～2010)		
受賞歴	第25回日本古典文学会賞(1999年度)		

研究領域	人文学・日本文学・中世文学	(SDGs)
研究テーマ※	金春禅鳳の能楽論とその文化的背景の総合的研究	
概要※ (概ね1000字以内) (写真・グラフ等自由)	<p>【研究の背景・目的・内容】 能は、観阿弥・世阿弥時代はその有力な後援者である將軍家や寺社を主な観客層としていたが、応仁の乱以降は新興商人らが観客かつ素人弟子として新たに重要な役割を担うこととなり、彼らを対象に風流能とよばれるショー的要素の強い作品が多数作られる。風流能はややもするとその視覚的要素が強調され、世阿弥が確立した歌舞重視の複式夢幻能より軽く見られる傾向があるが、風流能作者の一人である金春禅鳳は、祖父金春禅竹以来の関係で一条兼良や一休と接点を持ち、有力なパトロンであった官符衆徒古市澄胤が形成する南都文化圏とも関わりが深い。また、越前朝倉氏や周防大内氏の元に身を寄せていたことも知られている。このような禅鳳の能楽論は、世阿弥や禅竹の言説を踏襲しているだけでなく、当時の連歌師が重視していた五音説やアクセントに関する記述が特徴的である。また、伝書の記述からは澄胤や朝倉氏・大内氏との交流の様子も垣間見える。本研究はこれらに着目し、禅鳳を中心とする室町後期の能や能楽論を手掛かりに、能の享受の諸相を明らかにすることを目指している。</p> <p>【応用例、研究の展望】 従来「異色の風流能作者」というレッテルを貼られることが多かった禅鳳の能楽論にスポットを当てることは、動態としての能のあり方を解明するのみならず、室町後期の南都文化圏の実態を明らかにすることにも繋がり得る。</p> <p>【研究方法の特色】 基礎的な作業として『禅鳳雑談』をはじめとする禅鳳伝書の注釈作業を行い、その上で連歌師専順・宗砌・宗碩など禅鳳との関係が想定される人物の言説(連歌論、連歌の実作、和歌の詞書など)や花道・茶道伝書の記述と禅鳳伝書の比較を行う。また、『大乘院寺社雑事記』『蔭涼軒日録』『経覚私要鈔』など同時代の記録類の精査を通じ、禅鳳を取り巻く文化的・社会的環境を詳らかにする。</p>	
本研究関連特許・論文等	<ul style="list-style-type: none"> 「金春禅鳳自筆謡本の周辺」(能楽研究叢書7『金春家文書の世界』、2017年3月) 「金春禅鳳の文化的背景—作品と伝書から—」(『能と狂言』15、2017年7月) 	
共同研究・外部機関との連携への期待	能・狂言のアウトリーチ活動	